

女体化悪友幼馴染は

とっくに  
Xス随分ち済み



女体化悪友幼馴染はとつくにメス堕ち済み  
目次

1.	指向性ホルモン変成症と女体化幼馴染	表	3 P
2.	指向性ホルモン変成症と女体化幼馴染	裏	1 3 P
3.	隣りの元男子 藍沢ミナト		2 0 P
4.	女体化男子のドミナ達		3 3 P
5.	恋の噂と恋愛ごっこ		4 9 P
6.	年下男子に筆おろし		6 4 P
7.	透き通る夏		9 9 P
8.	小林昇とよくない取引		1 0 8 P
9.	男友達のメス媚び後輩堕ち		1 4 1 P
終.	従順DM後輩女子は悪友幼馴染のフリをする		1 8 1 P
後日談	チンポ応援 ハニトラチアリーダー		1 9 1 P
	女体化悪友幼馴染はとつくにメス堕ち済みのフェチシズム・ノート		2 0 1 P

1. 指向性ホルモン変成症と女体化幼馴染 ―表―

「おーっす、待ったか？」

手持無沙汰でひとり公園に佇む片岡藤司に、一人の人物が声を掛ける。

……団地の公園で待ち合わせるのはかつての恒例行事。中学の頃はずっと続いていた習慣である。

同じ団地に住む友人の藍沢湊緒あいざわみなおを早朝の公園で待ち、一緒に登校するのが片岡藤司の毎朝のルーティーンだった。

しかし、そのルーティーンは高校への進学を境に途絶えていた。

進学した高校がそれぞれ違ったから登校時間が合わなくなった、からではなく、藍沢湊緒が難病を患い、一年間休学していたからだ。

半年にも渡る闘病生活、それに続く半年のリハビリ生活を経て、今年の春からようやく復学することになった。

「お前いつも来るの早ええよなあ。寝坊とかしねえの？」

揶揄うように唇を片方吊り上げて笑う湊緒。

人を子馬鹿にしたようなダルそうな喋り方と態度は中学の頃の湊緒と特に変わらないように見えた。

「……お前がいつも遅いんだよ。これ以上遅くなったらマジで置いていくからな」

努めて平静を装い、ぶっきらぼうに返答する藤司。

わかっているよ気を付けるよとへらへらと笑いながら返す湊緒。

その態度は昔と変わらない。中学生の頃と全く様子だった。

しかし、その他の全てがすっかり変わってしまったていた。

藍沢湊緒は性別が変わる奇病により、目の覚めるような美少女の姿に変わってしまったのだ。

志向性ホルモン変成症、というのが湊緒の罹った病氣の名前らしい。

身体ホルモンバランスが突発的に変化して身体の構造自体が根本的に変形して、性別まで変わってしまうという奇病。

最悪、死に至る病であり、治療法は無い。

性別を戻す手段は無く、むしろ命を取り留めるためには適切な投薬や肉体矯正を行いスムーズに性転換が済むように誘導する施術を行わねばならない。

患者を生かすために、能動的に性転換を進めなければならない病なのだ……。

「……それで、体調の方は大丈夫なのか？ その身体」

ゴールデンウィークを終え、すっかり緑に変わった桜の木の下を潜り公園を出る二人。

駅までの短い道を並んで歩きつつ湊緒に尋ねる藤司。

湊緒はその丸く愛らしい瞳に疑問符を浮かべながら見上げてくる。

「ああ、全然大丈夫。想像以上に」

軽薄に気楽な様子で笑う湊緒。

その表情や言い方は中学校から顔馴染みの少年そのままののだが、愛らしい声と容姿は完全に少女のそれで、藤司は内心混乱させられる。

服装は藤司達を通っている高校の女子の制服。

紺のブレザーに紺色のチェックのミニスカート。

そして服装も女子だしそれを着込んでいる人物も完全に女子だ。

背は（女子にしては）そこそこ高い方で、スレンダーな身体付きはブレザー制服の品の良さを完璧に引き立てている。

髪型こそショートカットだが、襟足が長く少年的な印象を与えるが完全に女の子の髪型。

アーモンド形の大きな瞳に目鼻立ちがハッキリしていて愛らしさと凛々しさが同時に成立している、美少女と言っても差し支えない容姿。

黙って立っていればミステリアスなボーイッシュ美少女としか言いようのない完璧な瑞々しい美貌と言う外無かった。

同級生でこんな女子が居たら緊張で話し掛けるのを躊躇ってしまうレベルだが、この人物は間違い無く中学

時代からの男友達である藍沢湊緒なのだ。

「つかさあ……」

「なに？」

湊緒の背は中学の終わり辺りから殆ど伸びていない。

藤司も中学の頃は同じくらいの背の高さだったが、高校生になってから背が伸び、頭ひとつ分くらいの身長差が生じ、話掛けるとどうしても湊緒を見下ろす形になってしまう。

てか顔小っさ！ 志向性ホルモン変成症っていうのは骨格まで作り変える病気らしい。

しかし、美少女顔ではあると同時に、明らかに男だった頃の湊緒の面影が残っている。湊緒に姉か妹がいればこんな感じだったのかもしれない……。

「いや、四月よりも明らかにミニスカートになってんの、なんなの？」

「は……、ちょ、見てんなよ！ 恥ずかしいだろ！？」

そう言いながら湊緒は前屈みになり、両手でミニスカートの下を隠しながら太腿を擦り合わせて内股になった。

いや……、さっきまでがに股で歩いてたくせに急に女子みたいな仕草すんなよ……。

「おかしいだろそれ！ そっちが見せてんじゃん！ 隠すなよ！」

「はあ？ 見たいってこと！？」

「いや、み、見たくねえし……！」

湊緒は訝しげな顔をしながら両手をミニスカートから離し、またがに股で歩き始める。

「……これは、あれ、『女子同士』の付き合いだよ」

少し不貞腐れたように弁明を始める湊緒。

「付き合い？」

「制服の着こなしのブームとか、慣習みたいなもんであるだろう？ 学ランのボタンは一番上は開けるとか。制服のスカートは膝上丈にするべき、みたいな空気感が女子の中であってさ、オレもそれに倣ってるんだよ……」

「あー……」

藤司にも、思い当たる部分はあった。

藤司達の高校は比較的進学校寄りだが、校則の制限は緩く、式典以外なら制服を着崩していてもある程度許されている部分がある。

そして、藤司一年の頃、確かにある時期を境に女子のプリーツスカートの丈がほぼ一斉に膝下丈から膝上丈に変わった記憶がある。

男子高校生からすれば、女子のそう言った着こなしの変化は痛し痒しである。

つい見惚れてしまう瞬間はあるがエロ目線で女子を見ると確実にバレてしまうので、そういう目線で女子を見ないように理性でフィルターを掛ける努力が強要される。

「ウチの女子、ミニスカが多いなとは思ってたけど、まさかお前も真似するとは思っても見なかった」

「ああ、『郷に入っては郷に従え』ってヤツ。変に拘る必要も無いと思ったからな」

「……………」

病気による性転換で、心まで変わってしまう訳ではない。心は元の性別のまま肉体だけが性転換してしまうので、肉体と性別のギャップで苦しむケースは非常に多いそうだ。

ただ、病気による性転換は世間でも広く認知されており、肉体と精神のギャップを埋めるための支援活動や社会インフラの構築は近年かなり充実しているようだ。

病気の再発が起らない範囲なら、再度の性転換手術に医療保険が適応される場合もあるらしい。

藤司と湊緒の通う高校もジェンダーフリーに対する理解はそれなりにあり男女兼用の制服なんてものも用意されているらしい。

しかしそんな中、元男の藍沢湊緒が選んだ制服は男子用でも男女兼用でもなく女子の制服。

復学した湊緒は復学して初めて登校する日の待ち合わせ場所に、女子用制服を着込んで恥ずかしそうに藤司の前に現れた。

「……まあ、自分の性別について色々考えたんだけどさあ」

再会して間もない頃、努めて気楽そうな様子で自身の性別との向き合い方について湊緒は口にした。

「自分では自分のことちゃんと男だとは思ってるんだけど、男であることに強いこだわりがあるかと問われたら、別に……って感じなんだよね。まあ女になっちゃったら別に女でもいいかなあ……、って」

「……そんな簡単に割り切れるもんなの？」

「いや、全然割り切って無いよ？」

ただ、この見た目になって変に片意地張って男続ける気力も別に無いなあと思う。勿論、女の格好してみてやっぱ違うわってなったらまた改めて考えてみるけど」



「でも、仮でも女やってみるってことは、男相手に『そういう目』で見られるってことだろ？ キツくね？」  
「まー……、安全面とか護身的な意味で男の目には気を付けろってのはリハビリ期間中にさんざん言われた。さんざん言われたけどどの程度アレなのかは実際やってみないとわからないところもあるじゃん？ それも含めていまは検討期間かな、とは思う」

「……………」

このやり取りのとき、藤司は微妙にはぐらかされた気がしたのだ。

男を性的対象として見たり見られたりするのには平気なのかと訊きたかったつもりだが、藤司自身の名状しがたい戸惑いまで見透かされそうな気がしてそれ以上踏み込めなかったのだ。

無論、湊緒も色々悩んだうえでのいまの決断なのだろうから、湊緒のいまの在り様を尊重してやりたい気持ちはあるのだけれど……。

……そして現在、わりと気軽にミニスカを履くかつての男友達がそこに居た。

「てかさあ、前から疑問だったんだけど、女子ってなんでそんなミニスカート履きたがるの？」

「あー、なんか、脚のラインを出してる方がスリムに見えるらしいな。スカートが長いと、布の膨らみの分どうしてもシルエットが大きく見えるから、自分のスタイルに自信が有る無し以前にミニスカートの方がスタイルが良く見えるからみんな履いてるんだってさ」

「脚を晒すより細く見られる方が優先順位高いんだな……」

「むしろデブに対する強迫観念的忌避感があるんじゃないかね。てか晒してるからって女子の脚見んなよ！  
そういう目線、女子はマジでキモがるからな！」

「だから見ねえよ！」

もちろん直接凝視するつもりは無い。

ただ、見下ろす男友達に似た美少女と共にちらちら視界に映るミニスカートから伸びた脚は嫌でも脳裏に焼き付いてしまう。

湊緒のミニスカートから伸びる脚は短いソックスを履いているだけで、眩しい肌色の全景がほぼ剥き出しで晒されてしまっている。

ただ、がに股の足取りは如何にも男のそれで、意外と扇情的な印象を与えられない。歩き方ひとつで印象は意外と変わるのだなと藤司にとっては新たな発見となった。

「オレが女になったとしてもミニスカ履く勇氣は湧かないな。中が見えそうで怖い」

「あーそれは大丈夫。オレスパッツ履いてるし」

そう言うのと湊緒はあろうことか、自分のスカートを捲り上げて、その下に履いてある黒のスパッツを見せつけてきた！

反射的に目を逸らす藤司。

目は逸らしたが、下半身と太腿の上半分をびったりと覆う肌着とその稜線は刹那の間にしっかりと脳裏に刻まれてしまった。

「ぎゃははははは！ 首スイングする速度早やつ！ 首痛めるぞそれ！」

「急に下着見せてくんやよ！ 脚見るなって言ってたばっかだろうが！」

「こっちから見せてる分には良いんだよ！ オレの下半身見るのになにキョドってんだよ！？」

……そう言われて、湊緒の下半身に視線を向けないようにさり気無く振り向くと、「確かにやっぱ下品だな」と言いながらスカートから手を離れた直後だった。

太腿にくい込むスパッツの裾が、ミニスカートの下に隠れていく瞬間だけが、藤司の視界に映り込んだ。

「あ、もしかしてちよっと早かった？」

「どうでもいいよ。つか屋外でスカート捲り上げるとかマジで止めろよ」

呆れ気味に藤司が確かめると「確かにな」と素直に同意し、美少女顔に全く似合わない下卑た笑みを浮かべるのだった。

志向性ホルモン変成症、この病気について藤司が調べた際に特に奇妙に感じた特徴がひとつある。

性転換の成功率が、患者の意志に反映されるという点だ。

原理は不明だが、ホルモンバランスの変化による肉体型変形の進行度が患者本人の意思に大きく関わって来るのだそうで、たとえ本人の気持ちとはかけ離れていても「異性になりたい」と強く願いながら治療に臨まないと、上手く性転換が出来ないのだそうだ。

性転換が失敗すると肉体活動の安定性が失われて命を落とすのは確実で、医療行為の一環として患者には性転換を強く望むようにきつく指導されるのだそうだ。

人間の自尊心を上書きしようとするような、中々えげつない光景だが、現状の医療では志向性ホルモン変成

症で患者を死なせないようにする方法はそれしか無く、患者を生かすために、自身の性自認を差し出すことが求められる。

そしてこれは噂レベルの話だが、この病気による性転換をする際、高確率で『患者の理想に近い見た目』になるのだそうだ。

前述した通り、性転換の際は患者自身の意志が大きく反映された結果が訪れるのだが、それ故に、その見た目も患者の意志に大きく左右された見た目になるという説がある。

性転換後の自分の姿を具体的にイメージ出来るかどうかが生存率に大きく関わって来るので、患者がよりイメージしやすい理想の美形を無意識的あるいは意識的に思い浮かべ、それが性転換後の姿に反映されているかもしれない、という訳だ。

もちろんこれはただの噂。

かなり徹底的に志向性ホルモン変成症について調べた者しか知らないレベルの与太話だが、ボーイッシュ美少女としてあまりにも完璧過ぎる藍沢湊緒の容姿を鑑みると、その噂は真実ではないかと思いたくなってしまったのだ。

中学の頃の湊緒、こういう感じの女メチャクチャ好みだったし……。

## 2. 指向性ホルモン変成症と女体化幼馴染 ―裏―

正直言うと、オレは藤司とうじの生真面目さ、あるいは忍耐力にちょっと関心をしている。

中学の頃と変わらない態度で接するオレに対して、ちゃんと『男友達』として接しているのだから。

「つーかさ、トウジは定期券って一か月分で買ってる？」

「いや、六か月分だぜ？ その方が安いし」

最寄駅から電車に乗って数駅先、そこにオレ達が通う高校がある。

必然的に、電車の中は込み合い同じ高校の生徒の姿もちらほらと目に付くようになっていた。

「えー？ ミナオは一か月で買ってるの」

「そう」

「六ヶ月で良くね？」

「そうなんだけどさ、親が体調不良で学校いけなくなる可能性を考えててさ、体調が安定してるって確認出来るまで一か月分の定期代しかくれないんだよ。六ヶ月定期買ったあとに具合悪くしてまた入院とかになったら金の無駄だからってさ」

「え……、体調が急に悪くなったりとかする可能性があるのか？」

「いや、どうだろう？ 少なくとも退院してからの半年間は体調不良とか一切無かったけどな」

まあ生理のときは酷いけど……、と言おうと思ったけど、止めておいた。そこは例外にしておいていいだろう。

「いやー、でも体調が悪くなる予定が無いなら一か月分を小刻みに買うの勿体無くね？」

「いや、予定は常にねえよ。まあ一学期中問題無かったら六か月分の金額を請求しようになって……」

「いや、そこは変えなくてもいいな」

「ん……？ どういうこと？」

「オレもさ、親から毎月一か月分の定期代貰ってるんだけどバイトで貯めた金で六か月分の定期券を買ってんだよ」

「はあ？ 一か月分×6枚と六か月分の差額をちよろまかしてんの？」

「イエス」

「セコくね!？」

「学生には結構シャレにならん額だし。バレルまでは止められんよ」

「ははは、オレも真似するそれ!」

とまあ、こんなバカ話で小さく馬鹿笑いする男女2人組だ。

……高校生の男女が電車の中で楽し気に会話する姿は多分それなりに目立つ。同じ学校の生徒の視線もちよくちよく集めている。

藤司はこの視線を気にする風も無く男友達としてオレに接している。いや、自分達がどう見られているかそれなりに気付いているかもしれないが、とりあえず表面上は平静を装ってくれている。

ただ実際何も知らない、同じ高校の生徒からすれば、『それなりに顔立ちの整ったサッカー部の二年生』が

『アイドル並みに美人な後輩』と寄り添って楽しそうに会話しているようにしか見えなだろう。

オレは、周囲の視線がメチャクチャ気になってしまっている。

藤司は、オレの変化に対して出来るだけ平静を装い、中学の頃の関係をそのまま続けようと努力してくれている。

オレのアイデンティティーを尊重してくれている訳だし、オレも『表面上』は中学の頃と変わらず接してくれるのを望んだ。

でも実際、オレの方は。

オレの方は何もかも変わってしまった。

中学の頃の、男の頃で感覚で藤司や他の知り合いや世の中と関わっていくことは出来ないだろうと断言出来る。

藤司がオレに気取られないようにこっそりオレの容姿に見惚れている以上に、オレは自分自身の見た目と肉体に完全に頭をおかしくさせられている。

女の自慰行為を覚えてから、覚えさせられてから、自分自身をオカズにするオナニーを欠かした日は一日として無い。

いや多分、遅かれ早かれの問題だといまなら思うけれど、自分一人であつたなら、自分のこの圧倒的過ぎる容姿に男のアイデンティティーが完全に擦り潰される日はもう少し先だったと思う。

……退院して定期的なりハビリを受けていた時期、同級生だった女子の一人が連絡を取ってきた。

まあそれなりに仲の良かった相手に、オレの近況を知っていて「困っていることがあれば相談する、近い内に会いたい」と言ってきた。

人恋しさと、自分の存在意義を他人を通して感じたいという欲求があったのだろう。オレはその女友達に会いに行くことにした。

そして、それが大きな間違いだった。

その同級生の女子は数人の友人と共にオレを露骨な誘惑で籠絡し、女として固定化したウブなオレの肉体を徹底的に舐り上げた。

足先から脚の付け根まで撫で上げられ、脇腹を悶え苦しむほどに擦られ、手の平に女達の身体の感触を覚えさせられ、ちよつと大き過ぎる胸と乳首を弄ばれる被虐の快楽を覚え込まされ、唇にキスの味を耳奥に自分の身体がどれだけ卑猥かを教育させられ、尻を叩かれ撫でられ、下半身の二孔を指や玩具を突き立てて征服し、少年の心を徹底的に蹂躪した。

そう、同級生の女達は、オレを『自分達』と同じ存在になるように『男子』を『メス』に作り変えたのだ。それは志向性ホルモン変成症で魅力的な少女の姿に成り代わったオレを自分達の手駒に引き入れるための打算でもあったし、一人の男子を弄び破壊する悦楽を得る遊びでもあった。

女の快楽を教え込まれるのと並行して、女子達はオレに『オンナ』としての立ち振る舞いを教え込んだ。オンナらしい仕草や歩き方、男達に対する媚びた態度や男を誘惑する術をつい半年前まで中学生男子だったオレに教え込み、彼女達が理想とする『メス』に塗り潰していったのだ。

それは、自身のアイデンティティーが不安定になっていった当時のオレには劇薬以外の何物でも無く、女の姿で生きていくための抛り所となってしまうたのだ。

そうして退院から復学までの半年間、密かにメスとして調教され尽くしたオレは、復学に当たり、普段の言動を一年前の男子中学生の頃に戻すように命令された。



たった一年間で人が変わったような態度になっているのは周囲を混乱させるし、ボーイッシュな見た目にはその方が似合っているから、とのこと（因みにショートカットの髪型は彼女達の好みだ）。

家族の前では一年前と態度を変えないようにしていたので男っぽく振舞うのはそれほど苦勞はしなかった。ただ、頭の中は完全にメスの快楽と若いメスとしての自意識で満たされており、男っぽく振舞う態度や言葉には、全てメスとしての自意識と計算が籠められてしまっていた。

そうだ、わたしは藤司先輩の前で男子を演じながら爽やかなボーイッシュ少女としても見えるように意識的に振舞っている。

まず、わたしのルックス。

自画自賛するけど、有り得ない。可愛過ぎる。

凛々しくてミステリアスな愛らしさに溢れた顔を鏡の前で眺めているだけで無限に時間が流れていく。

そこに清楚なブレザー制服が似合い過ぎる。女の子を清纯で可愛く見せるための機能を最大限活かしてしまっているのだ。

全身を磨り上げた指の感触はいつまでも忘れられず、少女の裸体を撫でられ胸を揉みしだかれ二孔をぐちゅぐちゅにされた感触は常にわたしの中心を占めていた。

卑猥な快楽で貫かれたわたしの心の支柱。

それをピンクの可愛いレースの入ったブラとショーツで彩って、スポーティーな見た目のキャミソールとスパッツで蓋をして清纯清楚な制服でメスの身体を覆い隠してしまう。

そして外に晒された脚線と素顔と華奢なシルエットは上っ面だけの男の子を演じる。

何重にも倒錯的過ぎて、頭がおかしくなりそう。

わたしの頭の中は完全に『イケメンの先輩』に色目を使うメスでしかないのに、男友達として振舞ってしかも男友達として扱ってもらっているスリルに常にドキドキしてしまっている。

そう、最近、男子の前で男子のように振舞いながらコッソリ誘惑する遊びに嵌っていた。

スカートを捲ってスパッツを見せていたとき、スパッツとショーツの下に隠されたわたしの本性は完全に濡れていた。

満員電車の中、ドアの傍に並んで立つわたしと藤司先輩。

わたしが休学していた一年間で、藤司先輩の背丈はわたしとは頭ひとつ分くらい高くなってしまう少し見上げないと視線が合わせられない。自然に、上目遣いになってしまう。

身体もがっしりと男らしい体付きになりつつあり、その胸板に身体を預ければドキドキするくらい逞しいだろうなと夢想せずにはいられない。

「……えっ？　なんでこっち見てんの？」

造られて間もない子宮に響くようなアルトボイスで、戸惑い気味に問い掛けてくる藤司先輩。

「他に見るもんがねえんだから仕方ねえだろ？　好きで見てんじゃねえよ」

中学生当時の男の子だった頃を真似ながら生意気に答える。

一年間休学していたわたしは高校一年生で藤司先輩は高校二年生。

先輩に対してと考えるとあまりにも失礼な態度だ。

顔をこちらに向けた藤司先輩と視線同士がぶつかり合う。

ただそれは一瞬だけで、藤司先輩は、わたしから視線を逸らした。

照れちゃってる、可愛い。

しばらくの間、顔がにやけてしまわないように細心の注意を払いながら、藤司先輩の顔を視姦し続けた。時々藤司先輩がこちらにチラリと視線を向けるけど、わたしと目が合うとまた何気無い風を装って目を逸らしていく。

何となく視線がそっちに向いてしまっただけ、別にお前の顔を見るためじゃねえよ、みたいな。

……多分、中学の頃のオレは、藤司とオレは対等な友達だと信じていた。  
でもいまは、その関係は完全に崩れている。

藤司はサッカー部のレギュラーだし背も高いし体格にも恵まれているし女子にモテるし。オレの方は休学して一学年下になってしまったし最早身体能力では絶対藤司には勝てない。

それでも、オレには藤司を簡単に支配出来る確信がある。

表情ひとつ、仕草ひとつで藤司の平常心を簡単に乱せる。

段取りさえ踏めば、藤司を簡単に籠絡させられる確信がハッキリとある。

でもわたしからはいまはなにもしない。

オスをすぐさま誑かす術は、別のオスに対してすでに何度も試している。

いまは男友達のような距離感で、至近距離で少しずつ思春期の少年達を狂わせていくのがマイブームなのだ。

### 3. 隣りの元男子、藍沢ミナトさん

「なー、小林、悪いけれど、次の授業の教科書、一緒に見せてくれない？ 忘れたんだよ」

英語の授業が始まる直前、隣に座る藍沢あいざわミナトが頼み込んで来た。

申し訳無さそうに眉をへの字に曲げながら拝むように手を合わせてくる。その、凛々しいほどに整った容姿に似つかわしくないコミカルな頼み方である。

「……はい、いいですよ？」

こばやしのぼる

小林昇は英語の教科書を机の左端に映しつつ頼みを受け入れる。「サンキュー助かる」と言いながらミナトはそそくさと机を近付けてくる。

彼女の（女の子、とかテゴライズしても良いものか少々悩むが）席は窓際で、隣の席は小林しかない。教科書を見せてもらうよう頼む相手も小林しかないのだ。

そんな訳で、英語の時間の間、小林はミナトと頭を寄せ合いながら授業を受けることになった。

視線を横に向けると、真剣な眼差しで教科書や黒板を見詰めるミナトのあまりにも整った顔が間近に迫り、見惚れてしまいそうなので視線がバレる前にすぐに目を逸らす。

そんなことを何度か続けてしまい、「？　なんかオレの方見てなかった？　近過ぎたか？」と屈託無く尋ねられてしまったので、「いえ、大丈夫です……」と反射的に口にし、それ以降は理性で見たい気持ちを無理矢理抑え込み続けた。

五月に入ってから席替えで隣の席になるまで、小林はミナトとの接点を全く持っていなかったが、ミナトの特異なバックグラウンドについては小林も多少は知っていた。

ミナトは一年間闘病していて、今年復学したとのこと。

だから年齢は小林達や他のクラスメイトよりも一歳年上、病気が無ければ二年生に進学していたはずなのだ。しかもその病気がいわゆる性転換病。中学生までは、男だったというのだ。

ミナトは、これらのショッキングな身の上を入学式後の教室での自己紹介であっさりとかつ淡々と明かした。そしてあっけらかんと「一応女として生きていこうかなと思っています」と少年めいたぶっきらぼうさで自己紹介を纏めた。

まあ、最初の内はクラス中、だけでなく学年全体でちょっとした騒ぎになっていたが、いまはそれも大分落ち着いた。ミナトもミナトなりに、クラスの中に馴染んでいるように、見える。

「いや、マジで助かったわ。ありがとな」

授業終了後、改めて感謝を伝えるミナト。

「いえ、どういたしまして」

おずおずと返事する小林。

「あー、あとさ、オレに話し掛けるときなんだけど、タメ口で良いぜ？」

「え……」

「多分年上だから気を遣ってくれてるんだと思うんだけどさ、同級生同士じゃん？　なんかこう、距離を置かれてる感じがして地味に傷付くんよ。敬語無しで喋ってくんない？」

「あ……はい、うん……、なるほど。気を付けるよ」

「よろしく」

まるで悪戯を思い付いたような厭らしい笑みを浮かべながら口にするミナト。

「小林ってさ、田端<sup>たばた</sup>第二中学出身だよな？」

「え……、うん。何で知ってるの」

「梶浦<sup>かじうら</sup>から訊いた」

そう言いながらミナトは入り口近くの席で次の授業の準備をする梶浦を指差す。

そう言えればしばしば、ミナトが梶浦を始めとする運動系の部活に入った男子グループに交じって談笑しているのを見たことがある。

……正直内心、梶浦達のことが羨ましいとそのときは思っていた。

「てか、ウチのクラスって田端第二出身のヤツ多いよな？」

そう言いながらミナトは脚を広げつつ椅子を引き、大腿開きで身体を小林の方に向けた。チェックのプリーツスカートは少しだけ捲れ上がり、膝から少し上の太腿まで視界に入ってしまう。その男っぽいポーズのせいで、扇情的というより不格好な下品さが先行してしまう。

「クラスの三分の一くらいなんじゃね？」

だが、そんな風にハラハラしている小林の内心に気付く風も無くそのままのオラオラ系男子のようなポーズで話を続ける美少女。

やっぱり中身は男なんだなと、改めて思ってしまう。

「多いね、確かに」

「でも小林って、木崎きさきや原はらとも仲良いよな？」

「……あの二人とは高校に入ってから仲良くなったんだよ」

「あー、そう言えば席替え前、3人席近かったよな」

……ミナトは、このクラスの男子の交友関係全部把握しているらしい。小林は密かに驚いてしまった。

確かに、ミナトがクラスの男子と積極的に会話している姿はよく見る。かと言って女子とは交流が無い訳ではなく、傍目からはちゃんと打ち解けているように、見える。

そして常に、相手が男女ともに関係無く、男子らしい快活さと適度なガサツさを見え隠れさせているのだ。

「同じ中学の同級生ってさ、正直羨ましく感じる部分もあるんよ。オレは一年休学してたから中学まで同級生

だった奴ら、みんな二年生なんよ」

「ああ……」

先程までいかにも男性的で挑戦的な笑みを浮かべていたミナトが少し寂し気に笑う。

小林はなにか気の利いたことを言って慰めねば、という強迫観念に駆られてしまう。

「いやでも、いまはこのクラスメイトと上手くやってるでしょ？　なんかあったら、お、オレを頼ってくれ  
てもいいし」

そう言うのとミナトは手を叩いて爆笑し「ヤッベ！　メチャ格好良いこと言うじゃん！」と言った。

「あーじゃあ遠慮無く頼るわ。よろしくな！」

ニヤリと笑う様子、ヒトとの距離感は完全に男同士のそれなのだけれど、それが見た目完全な美少女から出力されてしまうととんでもない勢いで正気が削られてしまう。

小林は、密かに戦慄していたのだった。

「あの、藍沢さん、前から気になっていたんだけど」

「なに？」

休み時間の間に、隣の小林昇が話し掛けてくる。

瘦身でオレより少し背の高い眼鏡の男子。最初の頃はオレから話し掛ける方が多かったけど最近は小林の方から話掛けてくることも増えた。



「藍沢さんの本名って、もしかして藍沢『ミナオ』？」

ミナオの『オ』の部分強調しながら尋ねる小林。

「そうだよ。藍沢湊緒」

「でも小テストの答案とかノートの名前とかには『藍沢湊（ミナト）』って書いてるでしょ？ ……どっちが本名なの？」

「あー、それな……」

オレは股を開き、右腕を右太腿に乗せながら隣の席に座る小林の方に身体を向ける。

「いや、それ……、下品だから止めなよ」

すかさず、しかめっ面で指摘する小林。

「おっとすまん」

慌てて脚を閉じる。

「何度言われてもついやっちゃうんだよ」

「うん、マジで気を付けて欲しい」

……ある程度打ち解けてきた辺りから、小林はオレの脚を広げた座り方を注意してくるようになった。

ただオレは『癖だから』と言いつついまでもたまたまに脚を広げたまま座ることがある。

もちろんワザとである。

女の子らしい座り方はオレを調教した元同級生の——つまり現先輩の女子達に散々躰けられたので、本当は脚を広げて座る癖なんてとくに無くなっている。

同級生達の前で『まだ男だった頃の癖が抜けていない』振りをするためにワザと男っぽい座り方をしている

のだ。スカートが捲れ上がり、オレの太腿を目の当たりにした男子のリアクションもそれぞれ个性的で面白いし。

小林に指摘された通りに両脚を閉じて揃えて小林の方へ身体を向ける。

……普段男っぽい演技をしている相手に女の子の所作を見せる瞬間は、堪らなくドキドキする。

「それで、なんだっけか？ オレの名前か……」

「うん」

「……名前が男っぽいのが気になってさ。字面的にはそうでもないけど『ミナオ』って読み方が男の名前でよく使う『〵〵雄／男』みたいな感じでちょっと抵抗があるって言うか」

そう言いながらオレは、揃えた脚の上に置いたノートに『湊緒』とか『湊雄』とか『湊男』と書いてみた。「だから、あんまり重要度の高くない名前欄とか書類には『藍沢湊／ミナト』って書くことにしてんだよ。いまのオレには、そっちの方がしっくり来るような気がするからさ」

そして、ノートに書かれた名前達から『緒』と『雄』と『男』を黒く塗り潰して3つの『湊』が残された。塗り潰され、消された男性性。

「偽名みたいなもんか……」

「まー、偽名だな」

「……それなら本名を変えないのは、なんで？」

「んー、まあ、そこまでやる度胸は無かったからさ。一応性転換病の患者は本名の変更が認められるらしいけど、将来どうするのか自分でもまだはつきり決められてないし。いまの所は本名まで変える必要は無いかなって」

「なるほど……」

小林は、オレのそれらしい『現状』を噛み締めるように慎重に頷く。

なにも知らない他人向けに考えたそれらしい『作り話』を真剣に飲み込んでくれている。

「あともうひとつ重大な理由がある」

「えっなに？」

「『藍沢湊緒』だと画数が多過ぎるから時短のために『藍沢湊』ってことにしてるんだ」

「うわ……、なにその打算的な理由……」

そこでオレ達は小さく馬鹿笑いした。男子っぽい、豪快な笑い方。

「だからさ、とりあえずオレの名前を呼ぶときは『ミナト』って呼んでくれよ」

「まあ……、うん。でも藍沢さんのこと名前では呼ばないかな……」

「そうか？ あーまあ『女子』は名前では呼ばないか。まあどっちでもいいからさ」

「うん……」

『藍沢湊』。

それはメスとして調教されたわたしに『先輩達』が与えた刻印である。

本名は『藍沢湊緒』のままにも拘らず女体化してから新たに知り合った相手に『藍沢湊緒』と名乗るのは基本的に禁止されている。

『先輩達』は男としての『藍沢湊緒』とメスの『藍沢湊』をその時々に応じて都合良く使い分けるようにわたしに求めている。

都合で男と女を使い分ける、浅ましくて厭らしい人間になるようにわたしを調教しているのだ。

本名は男の子のまま、人前で『藍沢湊』、女の子としての名前を使うとき、わたしは密かに昂ってしまうのだ。

テストの答案や提出物に『藍沢湊』と書く度、ちょっとした嘘を吐きつつも自分の本性を曝け出しているような二重の背徳感を味わえてしまうから……。

「聞かれたついでにオレも小林に訊きたかったことがあるんだけどさ」

「え、なに？」

「眼鏡掛けてるヤツにさ、眼鏡を外した顔を見せて欲しいとき、どう頼めばスマートだと思う？」

「……………」

ものすごく怪訝な顔をされてしまった。

しょうがないと思う。

オレも小林の立場なら「何言ってるんだコイツ」と思ってしまうと思う。

「それ、遠回しにオレに眼鏡を外して欲しいって言ってるの？」

まあ当然、そういう質問が返って来る。

「まあ、要するにそうなんだけど、どういう風に頼めばスムーズに外してもらえるか、知見があるなら知りたいなと思う部分もある」

そう言うと小林は、陰険な顔をして少し思案してくれた。

……自分の容姿で男に頼み事をする、ほぼ確実にアツサリ応じてくれるのをオレは経験則で既に理解していた。

このスキルは使い過ぎ厳禁である。

とつくと駄目になった人間性がさらに墮落してしまう。

オスの自尊心をくすぐる効用を最大限意識しながらここぞというときに使わねばならない。

「……例えば、眼鏡の話題を前以て振つてみてさ」

そして生真面目にオレの無茶振りに応える小林。

「多少盛り上がった所で『眼鏡の度数がどれくらい知りたいから掛けてもいい?』とか言つて頼むとか……?」

「あ……、前振りなく頼むよりは多少スマートかもな……」

意外とちゃんと考えてくれた。

「つかそれ、なんか体験談っぽくね?」

「いやまあ、小学生のとき、女子にやられた」

「小学生の頃かよ!」

悪ガキっぽく豪快に笑った。

「よし、じゃあそれ、一回試してみるわ」

そう言いながらオレは、両足を揃えたまま居住いを正す。

男子を装う自分から、本来のメスとしての自分を身体全体で意識する。

「……小林君の眼鏡ってさ、結構度が強いよね？ レンズ太いし」

声の出し方を完全に変えた。

低音で管を巻くような喋り方を止め、明るい高音で緩急のある、弾むような女の子な喋り方を披露した。

小林は目を丸くして面白い顔で硬直してしまった。

「わたしさ、目は良いから眼鏡掛けた感じってどんなかわからないんだよねえ」

そう言いながら少し横から、小林のメガネレンズの幅を確かめるように横顔を覗き込む。自然と、お互いの顔の距離は近付く。

「いや、ごめん……、ちょっと……、なに？」

小林は、オレと自分の間に壁を作るように両手の平を突き出し、少し仰け反ってオレと距離を置こうとする。オレは、なにもわかっていないかのように小首を傾げて見せる。

「いや……、なんで急に喋り方変わってんの！？」

本気で戸惑っている様子の小林。

オレは厭らしく唇を吊り上げて鼻で嗤う。

「ちよつとでも眼鏡を貸してもらえる確立を上げるための下準備だよ！ キョドリ過ぎなんだよ！」

「貸して欲しいなら貸してあげるから、別に頼まなくてもいいよ！」

そう言いながら小林は自分の眼鏡を外し、オレに差し出してきた。

「さり気無く眼鏡を外させる練習がしたいって言ったろ！？ まだ外さなくていいから！」

「……漫才のやり取りみたいになってきた」

そうボヤきながら小林は外したばかりの眼鏡をまた掛けた。

「よし、じゃあ再開するぞ」

そしてまた、同級生男子に無邪気な態度で色目を使う『本来の自分』を呼び戻す。

「小林君、いつぐらいから眼鏡掛けてたの？」

「……小学校三年位かな？」

「えーそれ、結構早くない？」

「うん、クラスで2番目くらいだったかも」

「あ、もつと早い人居たんだ。あーでも、わたしの小学校のクラスも、それくらいから掛け始めてたかも……」

ねえ、小林君の眼鏡、一回掛けさせてもらっていい？　どんな風になるか見てみたいーい」

「う、うん。いいよ」

先程自棄のように外したときよりも、明らかに勿体ぶった様子で眼鏡を外す小林。

先程と違い、女の子モードのわたしが、身を乗り出して期待を膨らませた表情で真っ直ぐ見詰めてきていることに、小林は緊張しているようだ。

差し出される眼鏡、オレはそれを両手で受け取る。

「どうよ？　悪くないんじゃない？」

眼鏡を受け取った瞬間、意地の悪い男子の口調に戻し、ニヤリと笑って見せる。

「まあ、言った通りには出来てたけどさ……」

そもそものんだけど、藍沢さんはどうしてオレの眼鏡を外させたかったの？」

「まあ、そりゃあ、眼鏡外した小林の顔が見たかったからだけだ。……想像以上にベビーフェイスだな」

『童顔』とか『幼い』とか言うよりいくらかオブラートに包んだ表現だと思ったが、結局小林には渋い顔をさせてしまった。

「でも眼鏡掛けると、ちょっと暗い顔になり過ぎる。うーんどっちがいいかなあ……」  
「どっちにしろ微妙な顔なのはわかってるよ……」

「怒んなよ。眼鏡女子を見せてやるから元氣出せよ」  
「そう言いながらオレは、小林から借りた眼鏡を掛けた。」

「うわ、度、キツっ！　くらくらする！」

「いや……、こっちは眼鏡盗られてるから視えないし……」

「じゃあ、スマホでオレを撮れよ」

「そう言いながらオレはスマホを取り出しカメラ機能を呼び出した。」

「あとで画像見せてやるからさ」

そのスマホを小林に渡し、撮影ボタンの位置を教えた。

そうして始まる眼鏡版藍沢湊の撮影会。

スマホを向ける小林に向かって、背筋を伸ばし、清廉とした微笑を投げ掛けてやった。



#### 4. 女体化男子のドミナ達

昼休み、オレは高確率で校舎別館の空き教室に呼び出される。この呼び出し、余程のことが無い限りオレに拒否権は無い。

オレは人目を気にしながら教室を抜け出し、学校内を散歩する風を装い人通りの少ない場所から校舎別館に近付き、目的の空き教室の前にやって来た。

律義にノックをする。

いいわよお、という返事がすぐさま帰って来る。

スライド式の扉を開く。

空き教室の中では、3人の女子生徒が、机を中心に椅子に座っていた。

「おーす、お疲れー」

その内のひとり、ブリーチを掛けて少し染めた長髪のギャルっぽい女子が入って来たオレに挨拶をする。

彼女は長岡ユリカ。  
ながおか

この三人組のリーダー的存在で女子バレー部部員の二年生。

美人だが濃い化粧も相俟ってちょっと高圧的な印象が与えられてしまう。

「お疲れ様です……」

オレはそんな『上級生』に敬語で返事をする。

「あー、『ミナトちゃん』も食べるう？」

そう言いながらユリカの右隣に座るもう一人の女子、原野マイ美はらのみが机の上にあったお菓子の袋を手に取り、口の開いた方をオレに向けてくる。

「はい、いただきます」

オレはおずおずと彼女らの傍に立ち、袋に手を入れ、中から小さなチョココレートをひとつ取り出した。俯き気味にチョココレートを口にするオレの姿を、嬉しそうな笑顔でマイ美が眺めている。

原野マイ美は男子バレー部のマネージャーをしている二年生。

髪型やメイク、ファッションの傾向はユリカに似ているが、マイ美からは角が無くて柔らかい印象が与えられる。

「良かったじゃん。『先輩』からチョコ貰えて」

バカにするような薄ら笑いと共に、ユリカが揶揄ってくる。

「嬉しいでしょ、ミナト？」

「……はい、嬉しいです。ありがとうございました、マイ美先輩」

そしてそれに対して馬鹿正直に感謝の言葉を伝えてしまうオレ。

先輩。

その単語で目の前の3人を呼ぶたびに、オレは常に甘い屈辱感に苛まれてしまう。

彼女らオレと同じ中学校に通っていた同級生で、元々は上下関係など無かった。藤司とうじともそれなりに親しいはずだ。

そして彼女らは、性転換後の休学期間にオレを性的に調教し、『男』としての自意識を踏み躪り『メス』の振る舞いを教育した張本人達だ。

オレに敬語を使うように強要したのもその時期からで、高校一年生女子として人生をやり直すのだから、同じ高校の上級生であるわたし達に対しても礼節を持って接するべきだ、というのが彼女達の言。

中学までは『同級生の女子』として男の立場で接して来た。なんなら時々馬鹿話をしたり揶揄ってキレられたような思い出のある相手だ。

そんな元同級生達に対して、女の立場で敬語を使わねばならないようになったのはある種の転落劇のようで、酷い屈辱感に苛まれたのだが、いまになっては、その屈辱感に甘い快楽を見出してしまっていた。

彼女達に後輩扱いされるたび、彼女達を先輩と呼ぶたびに、自分で自分の男らしさを否定してより女の子らしくなるような錯覚が、わたしの中で生まれてしまっているのだ。

「一年の女子でもミニスカートにする子、増えてきたよね」

チヨコレートを口にするオレの姿を眺めながら、ユリカの左隣の『先輩』、水ノ瀬冬香みずのせふゆかが楽し気に呟く。

他2人と違い黒髪のおかっぱで化粧っ気も少ないが、長身に大人びた態度と落ち着いたアルトボイスでクルビューティー然としている。

帰宅部だが学外で色々遊んでいるという話を断片的に耳にする。

「ウチらがミニスカにしたのもいまぐらいだけ？」

「うん、そうだね」

ユリカが口になると、マイ美が柔らかな笑顔で相槌を打つ。

「最初、上級生が皆ミニスカにしてるのが妙に格好良く見えるのよねえ」

「そうそう、それ意識してから同級生の膝丈スカート見ちゃうと、なんか野暮ったく見えるんだよねえ」

「ミナトも、ミニスカにする前は『上級生』のミニスカ姿に憧れがあったのかな？」

所在無げに立ったままのオレの姿を眺め続けながら冬香が尋ねてくる。

ユリカとマイ美も好奇に満ちた目をこちらに向けてくる。

「いえ……、その、わたしは、そういうのに疎くて……。先輩方にファッションの指導をして頂くまでミニスカートを自分で履こうなんて考えも付きませんでした……」

……オレがスカートの丈を短くし始めた経緯、藤司に対しては「クラスの女子に併せて履き始めた」と説明していたが、半分は嘘だった。

クラスの女子がミニスカを履き始めて「藍沢さんもミニスカにしろよ」「絶対に会うから」と冗談半分で言われたから、というのも確かにある。

しかし本当の理由はこの3人からの命令である。

クラスメートの何人かがミニスカートを履き始めた段階で、ミニスカートを履き始めるよう前もって言われていた。

そしてこの空き教室内で、スカートをウエストから折り曲げて丈を短くする方法を直接指導された。

そのとき、初めてのミニスカートを姿を彼女達に散々揶揄われて褒められたせいで、周囲の視線が自分の晒さ

れた脚に向いているのに気付くたびに、オレは堪らなく恥ずかしい気分させられた。

「えーでもお、ミナトちゃんたまにちらちらウチらの脚視てるよね？ ミニスカが羨ましかったからじゃないのお？」

「いやそれはっ……」

ユリカが面白がる口調で質問してくる。

それを反射的に否定してしまったオレは自分の失態に即座に気付き、言葉を切った。

「いや、ってなにが？」

そんな不自然な返答をユリカが聞き逃すはずは無かった。

「いえ……、はい、先輩方の着こなしに憧れて……！」

「ふふふ矛盾してる矛盾してる」

冬香が楽し気かつ加虐的な笑みを浮かべながら立ち上がり、すぐ傍まで近寄ってくる。

近寄ると言うより密着だ。

冬香はそのしなやかな身体でオレの右腕に寄り添い、右手に指を絡めてくる。

「さっき先輩の着こなしは特に気にしていなかったって言ったばかりでしょ？ 嘘の整合性には気を付けないと」

嫌らしく指を弄ばれながら耳元で囁かれる。

冬香は女になったオレよりも少しだけ背が高く、自分の耳より高い位置から低音で囁かれるたびに、どうしようもなくオレの身体の奥の方が昂ってしまう。

この半年で、低音ボイスで発情してしまうよう脳と身体を馴れられてしまっていた。

「わたし達のミニスカから伸びた生脚を見て、ミナトの男としての性欲が反応してしまっていたんだよね。そこらの男子やオッサンと同じようにミニスカと脚の付け根をチラ見してしまうんだよね」

「……………やあ」

そう囁きながら冬香は開いている方の手でオレの太腿をくすぐるように撫でられ、全身が震え硬直する。

元同級生のセクハラを振り払う自由などオレには無くて、ただ太腿への愛撫を耐えるしかなかった。

「えゝマジでえゝ？ 気持ち悪い」

ニヤニヤ笑いながら立ち上がるユリカ。そしてそのまま、右太腿と右耳を責められているオレの前まで移動してくる。

「こゝんな可愛い顔してるのに、そんな汚いオッサンみたいな下品な性欲をウチらに感じてたワケえ？」

そしてオレの左頬に乱暴に手の平を添え、親指でオレの唇をそつとなぞった。

それから急に親指の力を強め、柔らかい唇を捏ねるように親指の腹でオレの唇を舐めた。

「……………っ！」

「どうなの？ 正直に答えなさい」

「は、はひい、興奮して、いまひた……」

下唇を親指で抑えられながら怪しい滑舌で素直に答えた。

唇を弄ばれながら男としての性欲を告白させられる状況は、屈辱感よりも彼女達を怒らせてしまうのではないかという恐怖心の方が勝っていた。

「えゝ、ミナトちゃんこんなに可愛いのに女子の生脚に興奮しちゃうんだあ？」

「君の方がよっぽど魅力的な脚をしているのにね？」

そうアルトボイスで囁きながら更にねっとりとした指遣いでオレの太腿を撫で回す冬香。そして反対側の太腿にユリカの指が加わり、同様にねちっこい愛撫を始める。

オレは『先輩達』の意地悪な悪戯をただ身を強張らせて耐えるしかなかった。

ー病気で性転換したとしても、性的嗜好が変わる場合と変わらない場合があるそう。少なくともオレは、変わらない側の人間だった。

退院した当初はまだ女にだけ欲情する性的嗜好だった。

それ故に彼女達の誘惑に抗えなかったし成す術無く調教されてしまった。

押搦われながら太腿を弄ばれているいまでさえ、オレの中に微かに残った男の部分が甘い恍惚感を感じてしまっている。

「あゝ、じゃあマイは背中からあゝ」

そう言いながらマイ美は背中にピッタリと貼り付き軽く腰を抱く。

そのままマイ美の腕はするするとオレの身体を這い上がり、ブレザーとワイシャツの間に侵入し、両手でオレの胸を揉み始めた。

「……………や」

思わず身を振りそうになるが本気で振り払うことは出来ない。

「わたし達の脚よりい、ミナトちゃんの方がよっぽどえっちな身体してるじゃん。正直羨ましいい」

甘い声でそんな風に言いながらも背中越しにオレの胸を揉む手には一切遠慮が無く、オレの巨乳を下から上へ救い上げるように揉みしだき、容赦無く胸を弄ばれる恥ずかしさを植え付けてくる。

「そおよお、アンタ他の女子の脚に見惚れてる場合じゃないのよ？ アンタ自身が、オトコに視られてる自

覚を持たなきやダメじゃない？」

ユリカの意地悪にニヤ付いた眼で瞳を覗き込まれながら、『オンナ』の身体を三方向から囲まれて玩具のよう  
に敏感な身体を弄られる。

「君は魅力的だからね。こんな綺麗な脚、男ならみんな見てしまうからね」

「そおよろ、ミニスカめっちゃチラ見されるから。オスの目を楽しませてる自覚、しっかり持ちなよお？」  
「は、はひい……！ 気を付けますう……！」

返事をする声の上擦ってしまふ。

胸や太腿を弄られている気持ち良さやくすぐったさ以上に、『先輩』に絡まれている怯えみたいな気持ちが  
声に出てしまっている。

『先輩』に囁かれながら身体を弄られると、どうしようもなく怯えと服従する気持ちに頭の中が支配され  
てしまふ。

そういう風に馴けられてしまったのだ。

「ミナトはもうすっかり女の子になっちゃったと思っていただけ、頭の中はまだちゃんと男子なんだね？」  
子宮まで響いてきそうなアルトボイスで冬香は耳元で囁く。

「うん。こんな可愛くてもお、同級生の前では男の子っぽく演技してるんでしょ？」  
オレの胸を無遠慮に籠め回しながらマイ美が柔らかな身体を背中に押し付けてくる。



「ちゃんと性別に無自覚なフリして男子達との距離感縮めときなさいよ？ ミナトには一年男子との橋渡しになつてもらわないといけないんだし」

先程の『女子の身体を男子に視られている自覚を持て』という話と微妙に矛盾している話を平然としてくるユリカ。

いや、このふたつは厳密には矛盾していないのだ。

要するに、『男にどう見られているのか最大限自覚しつつ、性別に頓着無いフリをして男っぽく男子と接しろ』と指示しているのだ。

「なんかさあゝ、スカートの中がじめつとするんだけどお？」

「……………ひいっ！」

太腿をくすぐっていたユリカの指がするりと上の方まで登ってきて、オナナの割れ目をスパッツとショーツ越しにスツと撫でてきた。

たったそれだけで、オレの背筋は震えてしまった。

「あはは！ しっかり濡れてんじゃくん！」

嘲笑と共にオレの女としての昂りをバラし、悪友2人のくすくすと嗤った。

「こーんな可愛いミナトちゃんがクラスでちゃんと男子のフリが出来てるのか、段々不安になってきたわねえ……………」

そう言いながら湿った割れ目を撫でていた手は少し前方に移動し、オレのクリトリスを親指で軽く抉るように刺激した。

「ひゃうっ……………！」

かつて男の象徴だったその部位は性転換する病気の際に見る見るうちに縮小し、完全に小さな肉の突起になり果ててしまった。

しかしその敏感さは相変わらずで、かつて男だった頃の記憶を肉体に呼び起こされた上で、それをぐりぐりと弄ばれる屈辱感に腰砕けになりそうだった。

スパッツ越しで刺激が弱いとは言え、クリトリスを弄られているシチュエーションそのもので、わたしは自然に昂ってしまうのだ。

「じゃあ、久しぶりにミナトちゃんのことテストしてあげようかな」

オレのクリトリスを玩具にしたまま、意地悪気に笑いながらオレの顔を覗き込むユリカ先輩。

「これからわたし達が、ミナトの可愛い所を褒めながら全身をよしよししてあげるの。それでわたし達が手を

離したらその瞬間ミナトちゃんは男子のフリをするの。わたし達と『同級生』だった『湊緒くん』みなおに戻るの」

それを聞き冬香先輩はふふとわたしの耳元で笑い、マイ美先輩は背中から胸を揉んだまま「えー！　なにそれ面白そう！」とはしゃいだ。

「もちろん敬語禁止よ。アンタが一年生の同級生と同じようにわたし達と接するのよ」

「え……、あ、え……？」

多分すぐ意地悪な提案にわたしは動転してしまった。

こんな、身体の敏感な部分を支配されて先輩への恐怖心に震えた心で、身体の芯から頭の中まで女の子にさせられている状態で、男のフリなんか、出来る訳無い。

マイ美先輩が、身体全体を摺り寄せてわたしの背中にピッタリと身体を押し付ける。

「ミナトちゃんの身体って、スタイル良いのに抱き心地すごく良いよねえ」

「ん……ああ……」

そう言いながらマイ美先輩はわたしの胸を揉みしだきながら自身の胸も背中越しに押し付けてくる。

そう言うマイ美先輩の身体も柔らかくて、背中から胸を弄ばれながら身体を包まれる感覚はいつそ心地良さを感ぜさせられ、ずぶずぶと女の子の身体の柔らかさに沈め込まれてしまいそうになる。

「こんなに可愛いミナトは、本当にちゃんと男の子に戻れるのかな？　もう頭の中まで完全に従順で愛らしい女の子なんじゃないのかな」

相変わらず太腿を撫でながら素敵なアルトボイスで囁いてくる冬香先輩。太腿のくすぐったさ以上に、中性的なアルトボイスで囁かれる声が心地良く、子宮が疼く感覚を強制的に味合わされるのだ。

「ほーら、これからナマイキな『湊緒くん』に戻らなきゃいけないんだから、そんな苛めてオーラ全開のアへ顔晒してんじゃないわよ？」

「……っ！　くうう……！！」

ユリカ先輩は意地悪に囁きながら、スパッツとショーツ越しにクリトリスを絶えず親指で責め苛む。

小さく悲鳴を上げるわたしは身悶えしてしまいうけど、マイ美先輩の上半身と胸をホルドされていて、逃げ出すことは出来なかった。

「良いんだよ？　気持ち良さそうにしているミナトちゃんの顔、とっても可愛くて守ってあげたくなくなるから、どんどん気持ち良くなるおー」

「そう、わたし達の指に身体を委ねて？　甘い刺激にただ素直になればいいんだよ？」

胸を揉まれ太腿を撫でられクリトリスを嬲られながら、マイ美先輩と冬香先輩がわたしの耳に甘い優しい言

葉を流し込んでくれる。性感が刺激され全身を甘く戦慄かせながら、その鼓膜を揺らす熱い吐息に、身を委ねたくなってしまう。そう、逃げられない状態で女性を弄ばれ続けてきたわたしの身体は、優しく躰を施す先輩達の声にもう逆らえなくなっているのだ。

「ミナトちゃん」

「お姫様」

「ミナトちゃん」

「お姫様」

「可愛いよ」

「もっと可愛い所見せて？」

「そう、素直になって」

「もっと可愛くなろうね」

「お姫様」

「ミナトちゃん」

「可愛いよ」

「メスになりな」

あう、あ、あ、あ、……くう、あ、……や、あん……………。

甘い言葉に頭がいっぱいになりながら、全身が宙に浮くような感覚になり、マイ美先輩の胸に背中を預けながら、その産湯のような柔らかさに完全に心を委ねてしまっていた。

このまま惨めな蕩け顔を晒しながら、涎を垂らして眠ってしまいそう……………。

「はい、よしよしタイムおしまい」

そして発せられるユリカの無慈悲な宣言。

その瞬間3人のドミナはスツとオレから身体を放し、甘い快楽に呆けた身体だけがその場に残された。急に、寒空の中に裸で取り残されたオレは、よろけながらなんとかその場に踏み留まった。

「わあ！ 大丈夫！？ 藍沢あいざわくん！？」

よろけたオレの様子に、大袈裟に驚いて見せるマイ美。

捨てられた犬のような心境で視線を向けると、離れた場所で心配そうにこちらを見るマイ美の視線とぶつかる。

その隣に若干侮るような冷たい表情を浮かべるユリカと、特に興味が無さそうでただ視線を向けているだけの冬香の顔が目につく。

「ふ、なに呆然としてんのよ、大丈夫かどうか答えてよ？」

半笑いの気味に言葉を促すユリカ。

その言葉の持つニュアンスは明らかに先程までとは種類が違う。

先程まではある種、子どもを躾けるような声色で言葉を投げ掛けられていたが、いまの彼女達の様子は、心配するマイ美にしろ急かすユリカにしろ、同じ立場の、異性に対する微妙に距離感のある言葉だった。

「え、いや……、あ、あの……」

オレは状況に気が動転したまま、言葉が出なくなってしまっていた。

だって、わたしの頭の中は完全にメスになったままで、先輩達の指の感触も、耳の奥を痺れさせた言葉も、まだありありと刻み込まれたままで、甘く意地悪な戯を浅ましいメスの身体が火照ったまま「足りない」「足りない」と燻ったままなのに。

このまま、「男に戻れ」だなんて……。

「その、大丈夫……、だから……」

精一杯虚勢を張りながら、オレは、何とかそれだけ答えた。

「藍沢くん、制服が乱れてるじゃないか、良くないよ？」

冬香が、わた、いやオレを指差しながら指摘する。

「服装の乱れは心の乱れだよ？　ちゃんと直しな？」

「わかつ……、たよ」

出来るだけ、ぶつきらぼうになるように意識しながら返事をし、マイ美に剝られた胸元のシャツの皺を伸ばして服装を整える。

「ふふ、そんなに焦らなくてもいいのに」

「焦って……ねえよ」

視線を逸らしながら、なんとか不貞腐れているような口調で返答する。

「藍沢さあ、ちゃんとクラスメイトとちゃんと上手くやれてるの？」

茶化すようではあるが、いつもの露骨に揶揄ったり甘やかしたりするようなものではない、対等な立場の相

手に対する口調でユリカが尋ねる。

「中学の頃の藍沢、いかにもガサツな男子って感じでデリカシーとか皆無だったじゃん」

「ちゃんと、やってるし……」

先輩3人の視線に委縮する心を叱咤しながら、なんとか、中学生の頃の態度を思い出そうと必死になっていた。

当時の出来事は、もはやるか遠くの思い出のようで、舐り尽くされた全身と啞内が思い出の中の『少年性』をあやふやに揺るがせ続けている。

「あー、あと、藍沢のクラスにバレエ部の女子が何人か居るからさあ、良ければ仲良くしてやってよ」

「お、おう……」

「何だか実にたどたどしくないかい？　まるで何かに怯えているみたいだ」

嫌な笑みを浮かべながら冬香が指摘すると、ユリカが耐えきれず吹き出した。

「べ、別に、怯えて、ねえし……」

卑屈な愛想笑いを浮かべそうになるのを必死に押し殺しながら、オレは無然と返事した。

「あーははは、もう帰っていいわよ。わざわざ呼び出してごめんねえ」

「お、おう……」

半笑いで手を振るユリカに素直に従い、背を向け出入り口へと向かおうとする。

正直、先輩たちの前で上辺だけの男子のフリを続けるのは苦痛だった。

調子に乗って軽口を叩いて、あとでそれを咎められるのではないかと気が気ではなかった。

しかし、彼女達に背を向けた途端、不意に背中に近づく気配を感じてしまった。

振り向こうとした直前、オレは、ユリカに背中から抱き締められてしまった。

「そっだあ、ミナトちゃん、忘れてたわあ〜」

耳元で吐息交じりに呟きながら、片方の手をすつとオレのスカートの下に滑り込ませ、スパッツ越しのわたしの割れ目をねっとりとした指遣いで撫で上げた。

「きゅひい……!!」

「来週水曜の放課後に、アンタにウリやつてもらうから、ちゃんと時間空けときなさいよ？」

「はひい……、わかりました、先輩……」

湿り気を帯びた割れ目を弄ばれながら、先輩の腕の中で惨めに震えながら、理不尽な要求を素直に受け入れるしか、わたしには許されなかった……。



続きは製品版でご覧になれます。